



# 伏木

## ときめき、わき立つ、港町「伏木」の伝統と心。

伏木は、恵まれた地の利から、天平時代には越中国府が置かれ、万葉の歌人でもあった大伴家持が国守として、赴任。また近世からは越中有数の港町として栄えてきました。

伏木曳山祭は、その港町の海上安全と海岸を鎮護する伏木神社の春の祭礼として行われます。始まりは江戸後期の1814年(文化11年)。海岸にあった神社が波で崩れ、現在地へご神体をお渡りする時のお乗り物として曳山が造られたと伝えられています。

神座に七福神がまつられた壮麗な曳山は、まさに港町伏木の歴史文化のシンボルであり、かぎりない誇りです。

昼は美しい花傘を広げた花山車として、夜には約360個の提灯で彩られた提灯山車として、潮風をまとい行く粋と意気がわき立つような鮮やかさ、勇壮さは人々をどよめきの渦でつつみます。



伏木神社



## 提灯山車

夜は激しく燃える炎のごとく

(ちょうちんやま)



## 「かつちゃ」に燃える、伏木町衆の心意気。

先端に付長手という約5mの檜の大木を、大砲のごとく取り付けられた曳山の重さは約8トン。宵闇が迫ると、花山車から提灯山車へと姿を変え、期待と興奮の渦に町全体が包まれます。やがて腹の底に共鳴するように山鹿流出陣太鼓が鳴り響くと、地鳴りとともに動き、駆ける山車と山車が全力でぶつかり合います。これが祭りの最高潮「かつちゃ」です。「かつちゃ」は、伏木の心意気が輝き燃える一大イベントです。



昼は春の爽やかな潮風と共に

## 花山車

(はなやま)



町・山車	中町 ひょうたん山車	湊町 ちょうちょう山車	石坂町 字山車	寶路町 せんまい山車	本町 がらがら山車	上町 ささ山車	十七軒町 ほら貝山車
だし(鉦留)	◆千成瓢箪(子孫萬代)	◆胡蝶(財宝福德)	◆楷書の壽の字(不老長寿)	◆重ね千枚分銅(富貴蕃財)	◆鉛鈴(宝来招福)	◆笹籠(延寿長生)	◆法螺貝(未来永劫)
七福神	◆福祿寿(天明元年1781年作)	◆毘沙門天(明治34年1901年作)	◆大黒天(万延元年1860年作)	◆恵比須(制作年不詳)	◆弁財天(天明元年1781年作)	◆布袋(天明元年1781年作)	◆寿老人(平成16年復元)
前入形	◆唐子(操り人形)	◆唐子(操り人形)	◆唐子(操り人形)	◆唐子(操り人形)	◆和子三番叟(操り人形)	◆唐子(操り人形)	◆唐子(平成20年復元)
後屏(鏡板)	◆郡大通(中国の仙人)	◆黄石公と張良(中国の故事)	◆菊慈童(中国の故事)	◆西王母(中国の故事)	◆漢の武帝(中国の故事)	◆黄石公と張良(中国の故事)	◆鶴亀(中国の故事)
特徴	下山の構造が伊達柱になっているなど、行装が他の山とは違っています。欄干に止ませた小鳥はこの山の独特のデザインで、下山の彫物の均整のとれた美しさと共に見どころのひとつです。	唐木の後屏や褐色で統一した上山の彫刻など、全体に男性的な偉容を誇っています。また擬宝珠柱や横木類の朱と金地との鮮やかなコントラストも見事です。	「菊慈童」に因んだ大輪菊の彫りものが見事です。高欄の上段が一連の透かし彫りふうの丸彫朱欄になっており、下山の小壁部分がイメダミ式の「箱欄間」になっています。	後屏の主座に「標山」の西王母を立て、上山の彫りものは西王母と山神の恵比須(波濤文と「高砂」の扇姫)ゆかりのモチーフによって、整合的に装われています。	全体に金碧の効果が傑出しており、特に竹林の緑色との対照は鮮やかです。また、白漆塗の透かし欄間は独自のもので、出来映えも見事です。	文人画の「蓬萊群仙図」を偲ぼせる多数の仙人彫刻と、その構図の巧みなど、躍動的な造形と合わせて伏木曳山の白眉と言えます。	十七軒町の曳山は、明治の大火で焼失しましたが、伏木町とけんか山が永遠に発展することを願って復元いたしました。高欄には、「未来永劫」を表す鶴のほか、親子獅子や四神獣の彫刻が施されています。